



〈論説〉いはゆる近代的トランスファー理論について (その一)

松井, 榮一

(Citation)

国民経済雑誌, 72(4):23-44

(Issue Date)

1942-04

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00055641>



いはゆる近代的トランスファ―理論

について（その一）

松 井 榮 一

一 序 説

二 バステープル

三 ニコルソン

四 タウシツクとヴィクセルおよびホランダ―

五 近代理論の特徴（以上本號）

六 イヴェルセンの機構論

七 その批判——結語

一

カール・イヴェルセンはその著『國際資本移動理論』(C. Iversen, Aspects of the theory of international capital movements. Copenhagen and London 1935) に於て、

國際資本移動機構の説明原理として二つの理論を對立せしめ、一を「古典理論」the "classical" theoryと呼び、他を「近代理論」the "modern" theoryと名づけてゐる。その名稱の當否の議論（松井榮一「いはゆる古典學派のトランスファ―理論について」國民經濟雜誌七〇の四、昭和十六年四月、）はしばらく措くとして、この二つの理論 two alternative explanations の代表的なものとして、イヴェルセン（五十一頁參照）

いはゆる近代的トランスファ―理論について

ルセンは、ミルとバステューブルを對立せしめ、その先驅者 the forerunners としてソーントンとリカルドーを擧げ、しかして、その後における兩理論の展開 later refinements を、一方においては、ゴッシェン、マーシャル、タウシツク、ヴァイナーらについて、他方においては、ニコルソン、ヴィクセル、ホランダーらについて概観し、更に、ドイツ賠償金支拂問題をめぐる一聯の論争に關しては、ケインズ・オーリン論争を中心にこれを検討してゐる。我々は既に、イヴェルセンのいはゆる古典理論についてさゝやかな研究を試みたから（松井、前掲論文、國民經濟雜誌七〇の四・五、昭和十六年四月・五月、同一ヴァイナーの國際機構論「同七一の五・六、昭和十六年十一月・十二月、參照」、本稿においては、彼のいはゆる近代理論について、その發展の經過をイヴェルセンに導かれつゝ跡づけ、次いで、その理論的性格を顧み、最後に、イヴェルセン自身による理論の展開を見ようと思ふ。

二

イヴェルセンがその近代理論の建設者としてバステューブルやニコルソンを擧げるのは、ホワイト（H. D. White, The accounts 1880-1913. Cam-bridge, Mass. 1933. pp. 18-9）のこれらの人々への簡単な參照 reference に従つたものであるとされてゐる（松井榮一譯「バーカール國際短期資本移動論」昭和十四年、二六頁註三八一頁註）。それにしても、イヴェルセンが、それ以前には未だ明確な形を整へるにいたらなかつた1) 理論を體系づけて、「近代理論」なる名稱を與へ、これを「古典理論」と對立せしめたことは、國際流通論のこの分野に對する彼の大きな貢獻といはねばならぬ。

- (1) 例へば「フンギン（J. W. Angell, The theory of international prices. Cambridge, Mass. 1926）」ホワイト（前掲書）などの學說的研究を見よ。

いはゆる近代理論が初めて述べられたのは、バスターブルの「一八八九年の論文」(C. F. Bastable, On some application of

Quart. Journ. of Econ.) におしてある、と示はれてゐる(ホワイト、前掲書、一八頁、イ)。彼はこの論文の後半にお

Vol. 4, 1889, pp. 1-17) におしてある、と示はれてゐる(ダエルセン、前掲書、二〇二頁)。

て、一方的支拂に基く國際均衡回復過程に關するミルの有名な章句(I. S. Mill, Principles of political economy, Ashley's ed.,

昭和十四年、三二九—三三〇頁、松井「いはゆる古典學派のトランスファ理論について」(一)、六三—五頁參照)を引用して、その妥當を詳細に吟味してゐる。曰く「この章句は

從來——私の知る限りにおいては——批判を免れたが、しかし、それは、眞理の要素とともに、國際的債務の現實の

結果に關する誤つた説明を暗示してゐるやうに思はれる——これは恐らく諸國の關係が調整される過程の種々の段階

を注意深く検討しなかつた結果であらう」(頁一四)と。彼はミルに従つて、調整過程を物々交換の場合と貨幣交換の場

合とに分つ。まづ前の場合について、バスターブルは次の如く述べてゐる。

「物々交換の状態を取扱ふ場合には、我々は、我々の假定に従つて、『貢納』が或る特殊の商品によつて支拂はれ
ると考へねばならぬ。ミルに従つてそれが商品一般 commodities in general によつて支拂はれると想定するのは、暗
黙の裡に價值尺度の存在を假定することになる。のみならず、そのやうにして支拂はれる商品の量は國際的物々交換
に入らない。即ち、(一)それ自體獨立せる債務の支拂があり、しかし、(二)商品の交換があり、もしくはあり
得る。簡単な場合を舉ぐれば——二國のうち、一方(A)が他方(B)に穀物一〇〇、〇〇〇クォーターの債務を負
ひ、しかして比較生産費の状態は貿易が兩國間に有利に行はれ得ないやうな有様であると假定しよう。この場合、A
は穀物一〇〇、〇〇〇クォーターを支拂ひ、Bはこれを受取るであらうが、いづれの側にも追加的損失もしくは利得

の餘地がないことは明かである。次に、Bは一〇〇、〇〇〇クォーターを必要とするが、しかし、それを債務の支拂として受取つたので、それ以上必要でないと假定しよう。この場合には、Aは前記の穀物の交換によつて得たであらうところの利益を失ふ——即ち、Aはそれと交換に與へられたであらう商品を失ひ、しかし、もしAがそれらの商品が必要とするならば、Aはヨリ一層重い條件でそれらを見づから生産しなければならぬ。しかしながら、Bは一五〇、〇〇〇クォーターを必要とするかも知れない。そのうちの二〇〇、〇〇〇クォーターをBは貢納の形で受取るであらうから、従つてBは五〇、〇〇〇クォーターだけを交換の手段によつて獲得せねばならない。Bがこの比較的少量をヨリ一層有利な條件で得るであらうことは、殆ど疑ひを容れない。その限りにおいてミルの所信は實際に正當化される。しかしながら、彼は一つの重要な制限を落してゐる。Bは一〇〇、〇〇〇クォーターを只で得たのであるから、それがために一層よく買入れることができる。即ち、Bの所得額は大となつてゐる。従つてBがヨリ大なる分量——例へば二〇〇、〇〇〇クォーターを得んと欲して、そのうち一〇〇、〇〇〇クォーターを買入れるかも知れない、といふことは可能である。この需要の増加は貿易條件をBに不利ならしめ、その限りにおいてAの蒙る損失を相殺するであらう。幾つかの商品を導入すれば、Bがその需要を擴大することは、ヨリ一層あり得ることとなる。何故なれば、Bは穀物をそれ以上望まないかも知れないが、Bがその増加した所得の一部を外國（即ち、Aの）生産物の購入に用ふることは殆ど確かであらう。もしも單一の商品即ち穀物の場合に、Bの需要が二五〇、〇〇〇クォーターに増加するならば、Aの不利は無くなるであらう。しかしてかくの如き結果は、一つの商品については殆ど考へられないに

ても、多くの商品が貿易される場合にはさうでない。數個の他の貿易國の存在もまたAの地位を改善せしむる傾向をもつであらう。Bは當然その増加せる所得を種々の國から得られるヨリ大なる供給を獲得することに用ひるであらうが、それらの國は次いでAによつて支拂はれるであらう。」(一四頁—五頁—)

次いでバステールは貨幣交換の場合について、次の如く述べてゐる。

「豫想せらるゝ如く、『貨幣を假定するも同じ結果が生ずる。』AはBに年々一、〇〇〇、〇〇〇ポンドの債務を負ふと假定しよう。この債務はBの手に委ねられた請求權であつて、その他の方法で得られた購買力の量に附加へられて、Bの購買力を増加せしめる。自國の輸出品の使用による外國生産物に對するBの需要はこの請求權を用ふることによつて減少し、貿易條件はそのためBにヨリ一層有利となる——その限りについて、しかしてその限りについてのみ、Aは現實に損失を蒙る。貿易の現實の狀態の下において、この種の影響が大したものではないことは明かである。

貿易條件の變動は、種々の國の競争と取扱はれる商品の夥しい數とによつて、比較的狭い限界内に限られる。また他方、これらの限界内において、問題となつてゐる特殊の力は殆ど力をもち得ない。貨幣量が債權國で増加し、債務國で減少すると斷定する點においてミルが正しいかどうかともまた疑はしい。貨幣所得額は疑ひもなく前者においてヨリ大となるであらう。しかしこの増加額は債務國に對して有する債權によつて得られる輸入品の購入に費されることがある。總輸入品は、物々交換の狀態を假定せるときと同様に、二つの部分——即ち、(一)債務支拂のために送られる部分と(二)輸出品と交換に與へられた部分——に分つことができる。従つて追加的貨幣を用ふる餘地は存しない

であらう。また物價水準は債權國においては債務國におけるよりも高くなるであらうと結論されない。前者〔債權國〕の住民は、ヨリ大なる貨幣所得をもつてゐるから、同じ價格でヨリ多くを購ふべく、従つて必要な輸入超過はもたらされるであらう。」(頁一六)

かくてバステープルは結論して曰く、「要するに、國際的債務の不利なる結果に關するミルの説は或る一定の狀態の下においてのみ眞であり、しかもその結果は瑣細なものであるやうに思はれるであらう」(頁一六)と。

即ち、バステープルによれば、貢納支拂の結果、購買力は受取國において増加することになるから、需要の狀態に變化が生じ、それが直接もしくは間接に支拂國の商品に向けられるならば、支拂國の貿易條件は必ずしも不利に轉ずることはない、といふのである。換言すれば、バステープルは貿易條件の變動を需要狀態の變化より説明せんとするのであつて(従つて貿易條件はいづれの方角にも變動し得る)、ミルの如く、貨幣量の増減による一般物價水準の變動より貿易條件の變動(貢納受取國に有利、支拂國に不利となる)を論斷することに疑問を提出したのである。しかしながら、こゝに注意すべきは、バステープルはミルの説を全面的に否定せんとするものでもなければ、また、それに代るべき機構の説明を原理的に定立せんとするものでもない點である。その限りにおいて、バステープルおよびニコルソン(次節(參照))は金移動の必然性を否定することに關心をもつてゐたのであつて、金移動に代るべき機構については、彼等は決して明瞭でもなければまた一致もしてゐなかつたといふ、キンドゥルバーガーの論評(邦譯二六頁註五)は正し

(2) 「しかしながら、彼『バスターブル』の議論は完全でない、何故なれば、彼は現實の機構について殆ど或は何事も述べてゐないし、また、彼の推理に従つて、均衡が回復され或は回復されない方法についてもさうであるからである。」(エンヂェル、前掲書、一〇二頁)

しかしながら、更に重要な點は、鬼頭教授も注意してをられる如く(鬼頭仁三郎『國際資本移動論』新經濟學、貢納全集第三回配本、昭和十四年、六一頁)、支拂によつて受取國の購買力は増加するといふとき、バスターブルがその購買力の(支拂國から受取國への)移轉は如何にして行はれるのかについて何等述ぶることなく、購買力の移轉によつて需要が變化した狀態から議論を進めてゐることである。購買力の移轉後における需要狀態の變化についてはミルも既に述べてゐることは、別の論文に記した如くである(松井、前掲論文(一)、六七―七八頁)。従つて、ミルにあつては、この購買力の移轉が如何にして可能であるか主たる關心事であつたのである。こゝにミルとバスターブルとの間に問題の焦點に相違があることを知るのであるが、この點における理論的間隙ないし思考の不十分さは、次節に述べるニコルソンにいたつて更に明かに表はれてゐる。

さて、以上の如く、バスターブルはミルの説を批判して、貿易條件は購買力の移轉に伴ふ需要狀態の變動によつて如何様にも變動することを主張したのであるが、しかしながら、「この點は僅かに彼の一時的な注意 passing notice を牽いたにすぎなかつた」(ホワイト、前掲書、一八頁)3)。何故なれば、彼の主著たる『國際貿易論』(The theory of international trade, London 1887)4)においては、機構の分析はミルのそれ(原理『アッシュレー』と全く同じであるからである。即ち、そこでは、國際均衡の攪亂は貨幣の移送によつて生ぜしめられる物價の變動によつてのみ回復されることを説明してゐるのである(バスターブル、前掲書、五三頁、七八頁)。たゞその場合に、對外貸付 foreign loan が均衡を回復せしめ、全體として見れば、また長期的に考ふれば不

必要であるところの・物價の突然の變動より生ずる不便を除くことを指摘して、「必要な修正」*a needed modification*を加へてゐる(同書、七八頁)ことに注意しなければならぬ。要するに、トランスファー機構に關するバステープルの眞の見解がいづれにあつたかは、にはかに斷定するを得ないのである。

(3) エンヂェルは、これを“*compartment thinking*”の一例として擧げてゐる(前掲書、一〇二頁)。

(4) 初版は前掲論文に先き立つこと二年前に出てゐるが、しかし、その後一八九七年に訂正再版が公けにされてゐる。(たゞし、本稿の引用は一九〇三年の訂正四版に據つた。)

(5) イヴェルセンは、ミルのこの對外貸付を彼のいはゆる均等化的な短資移動と解してゐる(前掲書、二〇六頁)。しかるに、キング・ドゥルバーガーはこれに反對して、「この『イヴェルセンの』解釋は適當に基礎づけることは困難である」と記してゐるが(邦譯二七頁)、我々はイヴェルセンの見解に賛成するものである。

三

バステープルに次いで近代の見解を表明したものは、ニコルソン(J. S. Nicholson, *Principles of political economy*, Vol. 2, London 1897)である。

ニコルソンは、金移動と割引歩合との間の關係については、マーシャルに一致して、「金平價 *gold par* を中心とする外國爲替の通常の變動は外國貿易に間接に影響するのみである、即ちそれは銀行準備と割引歩合を通じてである」と記してゐるが(ニコルソン、前掲書、二八七頁)1)、しかし、機構の敘述においてはバステープルに著しく接近してゐる2)。

(1) “*A treatise on money*” (初版一八八八年)において、ニコルソンは、通貨の流通量の變化と銀行貸付および割引歩合の變化との「直接的」および「間接的」關係について述べ、前者が「物價引下の第一層基本的方法」であるといつてゐる(イヴェル

セン、前掲書、二四三頁註二、による。

(2) ニコルソンがその著の序文において、「外國貿易理論に關する諸章の綿密なる校訂と批判に對して」バスターフルに謝意を表してゐることから、兩者の關係は略々推察されるであらう。

ニコルソンは、新規輸出に基いて擾亂された貿易收支の均衡は金移動→物價變動→貿易變動によつて回復されるといふ「ミルのもしくはリカルドーの解決」“*Mill's or the Ricardian solution*” (前掲書、二八七頁)に反對して、かくの如き考へは「焼豚は大火の連續によつてのみ得られるといふ原始的な素朴さを聯想させる」(九頁)となし、これに代るべき説明“*An alternative explanation*”として、貿易當事國における消費者の需要の轉換に注意し、必ずしも一般物價に影響することなくして貿易の均衡は回復されることを指摘してゐるが(第二十六章第十二節、二八七—九頁)、更に、貢納支拂の場合についてミルの説を批判して曰く、

「問題のかくの如き解決において注意すべきは、それが二國のみに關すること、〔および〕二國のそれぞれにおける物價の騰落はその通貨量の現實の増減に従つて起ると想定されて、銀行もしくは信用が考慮されてゐないことである。」(二八頁—九頁)

「しかしながら、かくの如き單純なる假定的場合においてすら、與へられた解決は、可能ではあるが、唯一のものでもなければ最もあり得るものでもない。支拂國の政府は年々の貢納のために租税を賦課しなければならぬが、それによつて人民の消費力 *the consuming power* はそれだけ減少するであらう。先づ第一に、現實の貨幣が人民のポケットから取り出されると假定しよう。その結果一部分は輸入品に對する需要が減退し、一部分は餘剰の國內商品が輸出

に用ひ得られるであらうと、我々は想定することが出来る。同時に受取國は——貨幣がその國に送られたならば——それだけ多くを費やし得るから、ヨリ多くの輸入品を購ひまたこれまで輸出されてゐた物品を消費するであらう。かくの如くにして貢納に等しき支拂國からの輸出超過は一般物價の變動なくして實現することが出来るのである」

(二九〇頁、
傍點—松井)と。

ニコルソンが指摘するところの貢納受取國における消費力の増加従つて需要の變動は、前節にも述べた如く、貢納が現實に支拂はれた後に起るところのものである。この點においてニコルソンの所論はバスターブルと同様であるが、ニコルソンにあつてはこのことは明確に意識されてゐる(前掲引用文中の(傍點の句を見よ))。しかるに、ニコルソンは更に進んで曰く、

「しかしながら、この結果をもたらすために貨幣が一國から他國へ現實に送られると假定する必要はない。最初の送金の場合に支拂國の政府は手形を買ひ漁るであらう。しかして同時に、二國の消費力の變化のために、この追加的需要を充すに足るべき手形の過剰があるであらう」(二九〇頁、
傍點—松井)と。

だがしかし、かくの如きことは如何にして可能であるのか。我々はその詳細なる説明をニコルソンから聽くことはできない。ニコルソンの主張する如く、第三國の存在と銀行および信用の存在(二八頁)を考慮に入れ、更に、當事國の生産轉換が極めて客易に行はれる(二九頁)としても、受取國宛手形の需要増加に對應して同時に供給が増加するといふことはできないであらう。もし兩者の間に時間的・段階的相違を認めるとすれば、受取國宛手形の需要増加より出

發する調整過程(松井、前掲論文(一)、六五頁、および「グ
アイナーの國際機構論」(二)、三九頁參照)の働き得る餘地が残されてゐることとなり、それを經て初め
て受取國宛手形の供給増加が結果せしめられるのである。かく考ふるならば、貢納支拂と同時に(或は、むしろそれ
に先んじて)消費力の變動を云々することには、いさゝか論理的飛躍があるやうに見受けられる。換言すれば、ニコ
ルソンにおいても、バステールと同様に、購買力の移轉によつて生ずる需要變動に注意が向けられるのみにて、購
買力移轉の過程そのものは問題とされてゐないのである。

(3) 従つて、イヴエルセンは、ニコルソンの示すところはトランスファの窮極の結果であつて、「このことはその作用が行はれ
つゝある間に若干の價格變動の生ずることを必ずしも排除するものではない。この場合に顯著な點は、如何に速かに必要な再調
整が實現されるか、また従つて如何に容易に手形の供給がその追加的需要に順應するかである。ニコルソンは明かにそれがむし
る速かに應ずる respond」といふ意見をいであつてゐる、云々」と、好意的な解釋を加へてゐる(前掲書、二四四頁)。

四

しかるに、右の如く十九世紀の終り頃にバステールやニコルソンに現はれた近代の見解は、その後二十年間殆ど
顧みられなかつた(ホワイ特、前掲書、一九頁、イ
ヴェルセン、前掲書、二四四頁)1)。ところが、一九一七年に發表されたタウシツクの論文(E. W. Taussig,
trade under depreciated paper, a contribution to theory, Quart. Journ. of Econ. Vol. 31, May 1917, pp. 380-403)が契機となつて、タウシツクとウィクセル、ホランダーの間に論
争が行はれ、その間にまた再びカルドー的な金移動の理論、或は近代的なトランスファ理論が展開されたのであ
る。

(1) イヴェルセン(前掲書、二四四頁註一)は、エンヂェルとバリーの記述に従つて、この間にイタリアの經濟學者デル・ヴェツキオが *Giornale degli Economisti* 誌上(1906)論文(G. Del Vecchio, Teoria dell'esportazione del capitale, 1910; Contributi alle dottrine della circolazione, 1911)において、近代的トランススファア理論を展開したことを指摘してゐる。即ち、エンヂェル(前掲書、三一四頁)によれば、デル・ヴェツキオは、割引歩合の變動と爲替相場の變動によつて國際貿易の均衡は回復され、必ずしも物價の變動を必要とせず、また金の移動も常に起るものではなく、のみならず、國際均衡の擾亂は長期においては國際的相互需要に及ばず影響によつて自動調整的である、と述べてゐる。また、バリー(M. Palyi, Zur Geschichte und Kritik der Theorie des internationalen Handels, Anhang zu: Theorie der internationalen Wirtschafts-Beziehungen von F. W. Taussig, Leipzig 1929, S. 370)によれば、彼は、國際收支の均衡の擾亂に對する國際的需要表の神秘的・自動的適應によつて物價變動なくして均衡は回復されとの理論によつて、ソートン・ミルの金移動の機構論に代位せしめんとした、といふことである。

タウシツクは右の論文において、借手がその借入手取金の全部もしくは一部を貸付國において直接商品購入のために用ふる場合には、古典派傳來の機構は作用しないことを認めた。即ち、彼は貸付の許與は貸付國より借入國への購買力の移轉を意味し、従つて借入國の需要表に變動が起ることを知つてゐたのである。しかるに、タウシツクはかくの如き場合はむしろ例外であつて、借入金金の全部または一部が借入國にて國內品(および勞務)に費やされる以上は傳統的な機構が作用せねばならぬと考へ、古典的分析を固執したのであつた(松井「いはゆる古典學派のトランススファア理論」、*Wicksell, International freights and prices*、(O. J. E. Vol. 32, Feb. 1918, pp. 404-18)を參照)。タウシツクのこの論文に對してまづ異論を提出したのはヴィクセル(K. Wicksell, *International freights and prices*)である。しかしながら、ヴィクセルはタウシツクの見解を全面的に否定するのではなく、完全に意見の一致を見ない若干の點において「適當なる補完」(四一頁)を行はんとするのである。即ち、彼は國際貿易と物價の關係において「運賃」

“cost of carrying”の存在の重要なことを指摘し、これによつて機構における物價變動を説明せんとするのである。彼はまづ、境を接する二國の場合と大洋によつて隔たれる二國の場合に分つて論ずる²⁾。

(2) この二つの場合において、兩國はいづれも自由貿易國と假定されてゐる(四〇五頁)。しかして金屬本位の場合と紙幣本位の場合に分つて論ぜられるが、こゝで我々が問題とするのは、勿論、兩國が金屬本位にある場合である。

第一の場合においては、運賃は全然無視される³⁾から、財の價格は兩國にて等しく、従つて物價水準も相等しい。この場合に「借入の影響は……借入國において購買力の増加、貸付國において購買力の減少となつて現はれ、その結果、商品のヨリ大なる分量が後者から前者へ移動し、ヨリ小なる分量が前者から後者へ移動する、換言すれば、借入國の側において輸入は増加し、輸出は減少することとなるであらう。かくの如き貿易狀態の變動に對する刺激は二國の物價の相違——これは理論的には不可能であり、實際上は極めて狭い限界内に限られるであらう——に見出されるのではなく、一方の國における商品に對する需要の増加、他方の國における需要の減少が主として前述の變動を生ぜしむるに十分であらう。」(四〇)(五頁)

(3) タウシツクは炯眼にも直ちにヴィクセルの議論の弱點をとらへて、海上運賃よりも陸上運賃の方が遙かに大なることがあるから、この場合にも運賃を無視すべきでないことを指摘した(Tausig, [A rejoinder] Q. J. E. Vol 32, Feb. 1918, p. 413)。

この場合に、借入國において増加した購買力が輸入品よりはむしろ國內品に向けられても、何等異なるところはない。「これは勿論輸入を減少せしめるであらうが、しかしもし輸入價額が同じ時期の間に借入れた金額だけ輸出價額を超過するならば、金を送つたり受取つたりする機會はないであらう。」(四〇)(六頁)(4)

(4) 既にたびたび記した如く(松井、前掲論文(二)、八三頁註二、および「ヴァイナーの國際機構論」(一)、四七頁註三)、ヴァイナーは舊著『カナダの國際貸借』において、ヴィクセルは借入金が直接國內品の購入に用ひられる場合でも、借入國の輸出に用ひ得べき商品量がこれによつて減少するから、同様に國際收支の調整は行はれりと論じたとなし(J. Viner, *Canada's balance of international indebtedness, 1900-1913*, Cambridge, Mass. 1924, p. 285)。その後これが通説となつてゐるが、しかし、ヴァイナーは新著『國際貿易理論の研究』においては、「現在私はヴィクセルによるこの議論の明確な敘述を見出すことはできない」と、前著の記述を訂正してゐる(Viner, *Studies in the theory of international trade*, New York 1937, p. 303, n. 28)。この點に關しては本文引用の一章句しか見出されないために、ヴィクセルの見解を明確に掴むことは困難であるが、ヴァイナーの最初の解釋の如く解するためには、イヴェルセン(前掲書、二三〇頁)の如く、國內品の購買＝輸出可能品 exportable goods の輸出減少と推論を進めることが必要である。

しかしながら、他方において、ヴィクセルは金の移動が若干行はれることを認めてゐる。けれども、この金の移動は、借入國における商品流通の増加によつてヨリ大なる貨幣量が必要となつてくるために、繼續的な資本移動の初期の段階において自動的に貸付國から借入國へ移動するものであり、従つて、その結果借入國において物價は騰貴するのではなく、通常の水準を維持するにすぎないのである(四〇頁)。(五頁)。

これに反して、二國が大洋を隔てゝ存在する場合には、財の價格は兩國間に運賃・保険料の高さだけ by the amount of their freight and insurance charges 開きがある筈である。いま、借入開始前に、二つの方向における運賃は相等しとすれば、兩國の平均物價水準は同一であるが、しかし借入後においては、輸出入の割合が變化するため二つの方向における運賃に開きが生じ(即ち、貸付國→借入國の運賃は商品輸送量の増加により騰貴し、借入國→貸付國の

運賃は商品輸送量の減少により下落する、従つて、輸出入品の價格は兩國において變動するから、物價水準は借入國にて騰貴し、貸付國にて低下する。その結果、金は若干量——前の場合よりは大なる——貸付國から借入國へ移動するが、「しかしこの流入は〔借入國の〕物價騰貴の結果であつて、原因ではないであらう。」(四〇七)

かくの如く、金移動を物價變動の原因とは見ず、その結果と看做す點において、ヴィクセルはリカルドーに従つてゐるわけであるが(ヴァイナ―『國際貿易理論の研究』三〇五頁註二五、參照)、彼にあつてもまた、國際借入の結果生ずる兩當事國間の購買力の變動がア・プリオリに議論の出發點となつてゐる。従つて、國際借入によつて購買力が如何にして移轉されるのかは、問題とならないのである。この點におけるいはゆる古典理論との相違を明確に示すものは、タウシツクの答辯(前出)の最初の部分における次の言葉である。

「ヨリ多くの貨幣が商品に對して提供されるのでなければ、如何にして『商品に對する需要の増加』がその價格を騰貴せしめるかを、考へることは困難である。そして貨幣の供給がヨリ大となるのでなければ、ヨリ多くの貨幣がそれらの商品に對して提供されることはできないのである。」(四一〇—四一一頁)

ヴィクセルに次いでタウシツクを批判したのはホランダ―(J. H. Hollander, *International trade under depreciated paper: a criticism*, Q. J. E. Vol. 32, Aug. 1918, pp. 674-90)である。ホランダ―はタウシツクが述ぶる如き機構における金移動の發生を否定する。タウシツクの如く、借入開始前に貿易は均衡してゐると假定すれば、そのやうな均衡の状態——ホランダ―は、これは國際需要の均等が確立してゐる

ることにほかならぬといふ——の下にあつては、借入はそれ自體金の移動を決して誘發しないであらう。けだし「リカルドーの時以來、『正貨はそれが過剰なる場合にのみ、即ち、それが最も低廉なる輸出可能の商品である場合にのみ、債務を決済するために海外へ送られる』と論ぜられてゐる。或は、ヨリ一層簡潔な形でいへば、『鑄貨の輸出はその低廉性によつて惹き起されるものであり、従つてそれは不利なる收支の結果ではなくして原因である』^(六七)からである。

この點において注意すべきは、右の章句にも現はれてゐる如く、ホランダーはリカルドーの理論が一般に承認された理論であると考へてゐたことである。のみならず、既にしばしば指摘されてゐる如く^{(二〇頁、イヴァエルセン、前掲書、二四八頁、松井「いはゆる古典學派のトランスファー理論」、タウシツクすらミルの説がリカルドーのそれと同じであると考へてゐた。従つて彼等は、同一の理論的地盤の上に立つて議論してゐると思つてゐたのである)。}

(5) 「ホランダー教授も私も承認された(リカルドーの)理論を論議してゐるのである、云々」と、タウシツクはホランダーへの答辯において記してゐる (Tausig, A rejoinder. Q. J. E. Vol. 32. Aug. 1918. p. 681)。

それはとにかくとして、ホランダーの主たる見解は、國際借入は貿易の均衡ないし國際需要の均等を攪亂しないから、金の移動は生じない。もしタウシツクの想定する如く金が移動するためには、貸付國において正貨は借入國に比して過剰であると假定しなければならぬ。借入が行はれた場合に實際に生ずるところのものは、貸付國(或は、借入國)における借入國宛(貸付國宛)手形の需要(供給)の増加であつて、これらの變動は金現送點内にて行はれ、正

貨は決して貸付國から借入國へ移動しない。しかししてこの爲替變動によつて必要な貿易變動が起り、比較生産費の系列において比較的低廉な商品が貸付國から借入國へ移動する。この商品移動の結果、貸付國の貨幣量は相對的に過剩となり、金は借入國に向つて流出するにいたる、といふのである(一六七頁)。この「借入取引が金の移動に及ぼす後の影響」"later effect of a borrowing transaction upon the movement of gold" (六七頁)に關しては、ホランダ―はさきに述べたヴィクセルと同じ考へ方をしてゐるわけである。

右のホランダ―の批判に對して、タウシツクは、

(一) 爲替相場の變動(金現送點内の)は貿易變動に對して重大なる影響を與へない。

(二) 借入は繼續的と假定される。この場合には新なる均衡確立への第一段階は正貨の移動である。

と反駁して、自説を固守してゐる(一六九頁)。(一三頁)。これによつても、兩者の見解が全く正反對の立場に立つてゐることが、明かとなるであらう。

(6) ヴァイナ―は、ホランダ―のこの見解は、爲替變動が貿易の方向に及ぼす影響を過大評價せるのみならず、更に、ミルが爲替の「自動調整的」變動と呼ぶところのものと、物價を通してのみ匡正され得るものとを區別し得なかつたために、積極的に誤謬に陥つてゐる、と批判してゐる(『カナダの國際貨借』一五一―一三頁)。これに對して、イヴエルセンは、タウシツクやヴァイナ―の批判は當らないといふ。けだし、ホランダ―の依據するところはかくの如き爲替相場變動の商品移動に及ぼす直接的影響ではなく、購買力移動の直接および間接的影響であるからである(前掲書、二四八頁)。しかしながら、イヴエルセンも認むる如く、ホランダ―の敘述は必ずしも明確ではなく、從つてかく解し得るか否かは多少疑問である。

五

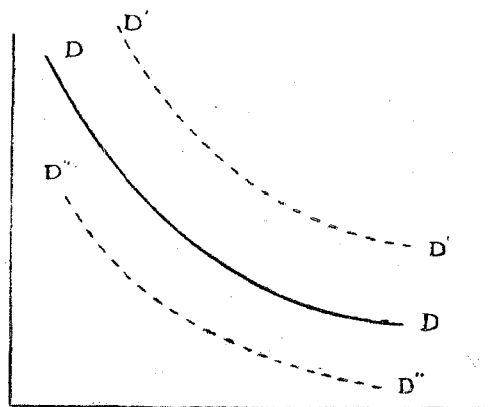
近代的トランスファー理論は、その後、ドイツの賠償金支拂をめぐつて行はれた論争の間に、特にオーリンによつて、最も明瞭に展開された。たゞし、オーリンは既に一九二四年にスウェーデン語で刊行された著書(B. Ohlin, *Handelsn 1924, p. 78*)の中で、この種の理論の概略を述べた、といふことである(イヴェルセン、前掲書、二四九頁)しかしながら、オーリンの見解は、ケインズとの論争に關聯して、別の機會に述ぶるを便宜とするので、こゝでは觸れないことにする。續いてイヴェルセン自身の所論を展開すべき順序であるが、それに先き立つて、こゝで一應、イヴェルセンに従ひ、古典理論と近代理論の理論的特徴を比較して置かう。かくすることによつて、我々はイヴェルセンにおいて展開せらるべき問題の所在を把握することができ、従つて、その觀點からイヴェルセンの所論を眺めて、近代理論としての彼自身の機構論の學說史的地位を定めるよすがともなし得るであらう。

イヴェルセンは、ミルとバステールを以て代表せしめた、この二つの理論を比較して、次のやうに述べてゐる。

(一) 出發點における需要狀態に關する假定の相違

ミルは、資本移動にも拘らず、兩國における國際的需要の狀態は變らない、と暗々裡に假定してゐる。これに反して、バステールは、相互需要の狀態を變化せしめるのは資本の國際的移動の本質である、と明かに論じてゐる。この點は次のグラフを以て説明するならば、明かとなるであらう。

即ち、ミルの見解によれば、兩國の輸出入の増減には、この與へられた需要曲線に沿ふたそれら輸出入品の價格の



變動が伴はねばならぬ。即ち、國際資本移動は兩國における輸出入の關係を變動せしめるが、これには相對的價格水準の推移が伴はねばならない。しかして貸付國は輸出超過をつくり出すために廉價にその商品を提供しなければならぬといふ。これに反して、バスタープは、資本移動は需要曲線の上または下への（即ち、 DD より $D'D'$ または $D''D''$ への）推移を惹き起す。従つて、價格の變動なくして從來よりも大なるまたは小なる數量が賣られる、と主張するのである。イヴェルセンはこれに註釋を加へて、「この後の術語を用ふるならば、バスタープは、需要は欲望にのみ依存するものではなく、人々が自由に分し得る購買力の數量によつても影響される、と論じたかも知れない」といつてゐる。

（二）その他の相違

まづ第一に、特に、（い）費用の假定における相違、が擧げられる。即ち、古典理論は費用不變の假定の上に立てられてゐるに對して、近代理論は費用可變の可能性を承認する。従つて、これより（ろ）價格分析における相違、が生ずる。即ち、古典理論は一般物價水準の分析に終始するに對して、近代理論は部分價格水準の分析に進むのである。従つて、これより（は）兩理論の主たる相違が生ずる。即ち、古典理論は、相對的物價水準の恒久的推移、貿易

條件の借入國に有利化を導き出し、これがトランスファー機構の必要なる部分である、と主張する。しかるに、近代理論は貿易條件のかくの如き變動を否定する。その代りに、トランスファー機構の動因は購買力の移轉そのもの、およびそれが兩國の需要狀態に及ぼす影響にある、といふのである。(イヴェルセン、前掲書、二〇六—八頁)

繰返していふならば、古典理論は、まづ第一に、イヴェルセンも指摘する如く、出發點において需要の不變を前提してゐる。即ち、國際間に資本の移動が行はれても、兩國の需要狀態は、その價格狀態が變動しない間は、不變に保たれる。従つて、その限りにおいて、資本移動に對應する全面的貿易變動は生じ得ないこととなり、貿易變動が實現されない以上は、金が移動しなければならぬ。この金移動によつて初めて兩國の價格構造は變化し、價格變動の發生を俟つて初めて兩國の需要は變動し、これによつて必要な貿易變動が成立する。金移動によつて兩國の價格水準は、金流入國即ち資本の借入國において騰貴し、金流出國即ち貸付國において下落する。従つて、貸付國の輸出超過、借入國の輸入超過が實現し、移轉資本額に等しき價額の追加的商品移動が成立するにいたる。しかして、右の如き價格水準の相對的變動によつて、貿易條件は借入國に有利に、貸付國に不利に變化しなければならぬ。(松井「いはゆる古典學

派のトランスファー理論につづて」(一)、八六頁)

これに反して、近代理論は、需要の狀態は、古典理論において措定される如き物價の變動なくとも、國際資本移動に伴ふ購買力の移轉によつて變動する、と主張する。即ち、購買力の國際的移轉によつて兩當事國の所得は變動(増減)する。所得が増減すれば需要狀態に變動を生じ、個別價格水準に變動が生ずる。この個別價格水準の變動によつ

て貿易の變動が實現され、従つて貿易條件も變化する。しかしながら、貿易條件は常に必ずしも資本の借入國に有利になるとは限らず、その反對の場合もあり得る。そのいづれであるかは、一に國際需要の變動狀態如何にかゝつてゐる。

いま、これを簡單なるシェーマを以て表はせば、次の如くである。

古典理論 國際資本移動——需要不變——↓金移動——↓一般物價變動——↓需要變動——↓貿易變動（貿易條件は借入國に有利化）

近代理論 國際資本移動——購買力移轉——所得變動——↓需要變動——↓個別價格變動——↓貿易變動（貿易條件はいづれにも變動す）

即ち、いづれも需要變動の發生を認めてゐるわけであるが、古典理論は價格の變動せざる限り需要は變動せずとするに對して、近代理論は價格の變動なくとも購買力の移轉——所得の増減によつて需要は變動し得るといふ。従つて、兩論の理解する「需要變動」の意味に相違があると考へねばならない。即ち、古典理論における需要變動は需要の價格弾力性 price elasticity of demand を問題としてゐるに對し、近代理論においては需要の所得弾力性 income elasticity of demand 或は需要の屈伸性 flexibility of demand が考へられてゐるのである⁽¹⁾。

(1) 需要の狀態といふとき兩理論に意味の相違があることは、鬼頭教授も指摘してをられる。即ち、古典理論が價格の變化と需要量の變化との間の關係を重視してゐるのに對して、近代理論は需要の方向および需要の弾力性の變化を問題としてゐる、と。

(鬼頭、前掲書、六八頁)

右の需要變動に關聯して考へられるのは、兩理論における購買力移轉機構に關する思考の相違である。即ち、古典理論においては、資本移動に伴ふ購買力移轉の機構が重視され、いはゆる金移動の理論を以てこれを説明しようとするに對して、近代理論にあつては、購買力移轉の機構は殆ど問題とされず、資本移動に伴つて購買力が國際間に移轉せしめられた状態から議論を進めてゐる。従つて、所得および需要の變動が直ちに導き出されるのである。この點は既にバスターブル以下の所論について述べたところであるが、鬼頭教授もオーリンが購買力移轉の機構について無關心であるに對し、タウシツク等が最も主力をそそぐところは購買力が如何にして移轉されるかの問題であるとして、二つの説の間の齟齬を看過すべきでないことを指摘してをられる(鬼頭、前掲書、七一頁)。

しからば、かくの如き特徴を有する近代理論はイヴェルセンによつて如何に發展せしめられたであらうか。特に、上述の如きバスターブル以來オーリンにいたるまで十分には注意されなかつたところの購買力移轉の機構は、イヴェルセンの所論において如何に取扱はれてゐるであらうか。以下、これを一つの問題點として、イヴェルセンのトランスファー理論を見ることにしよう。(未完)